

ニュータウン 2.0

～多摩版 CCRC の構築に関する一考察～

2015 インターゼミ 多摩学班

1. 本研究の目的・背景

稲城市・多摩市・八王子市・町田市にまたがる日本最大規模のニュータウンである多摩ニュータウンは、首都圏から20～30キロ圏内にあり、ベッドタウンとしての役割を果たしていた。

しかし、1971（昭和46）年の多摩市諏訪・永山地区において第1次入居開始から40年余り過ぎ、日本全体の人口減少社会の突入と本格的高齢社会の到来も相まって、多摩ニュータウンの役割は大きく変化しようとしている。

こうした多摩ニュータウンの役割の変化を踏まえ、新たな機能を備えた多摩ならではの「ニュータウン」として生まれ変わるための処方箋を示すための研究を行う。

なお、本研究では、「総花的」な取組ではなく、「多摩版 CCRC」を軸に、高齢者の豊かさの充実に焦点を当てた提案を行うことを目的とする。

2. 海外で注目される CCRC

米国では、高齢者が移り住み、健康時から介護・医療が必要となる時期まで継続的なケアや生活支援サービス等を受けながら生涯学習や社会活動等に参加するような共同体（CCRC：Continuing Care Retirement Community）が約2,000か所存在し、推定居住者数は約75万人といわれている。

なかでも、大学での生涯学習等を通じて、知的刺激や多世代交流を求める高齢者のニーズに対応する大学連携型 CCRC が近年増加しているという。

3. 従来型 CCRC との違い

研究にあたり、米国を中心とする従来型 CCRC をそのまま多摩地域に適用するのではなく、従来型 CCRC の諸問題を踏まえて大きく修正あるいは機能を追加する。例えば、従来型 CCRC の多くは入居するために多額の資金が掛かるが多摩版 CCRC は誰もが手軽に入居可能とすること、高齢者自体が自らお金を生み出す生産者となることなどである。また、当地域の現存資源を最大活用するとともに、新たな交通移動手段の整備により坂が多いという当地域のデメリットを緩和する方策も検討する。